アジア・キリスト教・多元性　現代キリスト教思想研究会
第17号　2019年3月　47～50頁

コメント

岩野祐介

海外出身の研究者を代表者とし、複数ジャンルにまたがる研究者の集まった本パネルは日本キリスト教史、日本キリスト教思想史研究のすそ野を広げ、様々な視点を得るという点からも、有意義なものであった。とりわけ、淺野により新約聖書学、新約時代史学の視点からの発表がなされたことは、本パネルに深みを与えたように思われる。筆者はコメンテーターとして本パネルに参加した。著者は近代以降の日本キリスト教史を主たる研究対象としているので、日本キリスト教史における殉教ということを念頭において、若干のコメントを記したい。

本パネルに関して特に重要であったと筆者が考えるのは、殉教という問題を、個々の信仰者の、信仰の強さや信仰理解の深さを証しするものとして説明するだけでなく、広義の「宣教」という視点から捉えることの意義を示すことができたことである。

殉教は、信仰を証しする行為のなかでも究極的なものとされるが、それが起こるためには、教会・キリスト教が抑圧・迫害されている、という状況が「必要」なのである。宣教がすすみ、キリスト教的な（あるいはキリスト教に親和的・寛容な）社会が成立している環境で、殉教がおこることはない。迫害という状況が生ずるのは、宣教の前線であると考えられる。こうして、世界史のなかでは相対的にキリスト教の伝播が遅かった日本において、殉教がおこり、それをいかに歴史的・神学的に評価するか、が問題となることになる。

キリスト教はそのスタートから、「開祖」としてのイエスが公権力により処刑され殺される、という困難を抱えることになった。支配的公権力の側から処罰される、というのは明らかにネガティブな事態である。宣教の展開のためには、現代的な表現をするのであれば反社会的な宗教ではないことを説明・弁証する必要が生ずる。そこで用いられたのが、キリスト教の成立以前から存在する「殉教」という考え方であると言ってよいであろう。

新約聖書が描き出す時代、およびそれに続くローマ帝国による迫害期の殉教者たちは、イエスを含め、時代状況のなかでやむを得ず命を落とした。それを、後代のキリスト教会が、あるいは信仰を捨てず死や苦しみをもって証しした「殉教」であった、と位置付ける。こうしてキリスト教は、信仰を捨てなければ殺す、という脅しにすら屈しない宗教である、とい

う鮮烈な印象を教会の内外に示すことができた。これは、宣教をすすめるうえで、強力なインパクトを与えたことと考えられる。

もちろん、十字架上のイエスの死と、キリスト教信仰を捨てなかったことによる殉教者たちの死とは、本来まったく意味合いが異なる。子なる神イエスの死は、人類を罪から贖うものである。それは基本的に一回性のことである。すなわち、殉教者たちの死が、イエスの贖罪死を補完する、といったことでは決してない。しかし、上述した通り、死をも恐れない、屈しない、といった点において、その後の信徒たちの死がイエスのあり方にならったものだ、という説明の仕方もできる。たとえば、カトリックにおける殉教の定義では、武器をとり抵抗したものを殉教者とはみなさない。苦しみを受け容れることは、イエス・キリスト自身が苦難を受け容れたことにならう行為と考えられるからである。また、事実としてある人間の命が失われることが周囲に与える悲しみ、苦しみ、喪失感を考えた際、それらを慰める手段として死に対する意味付けがなされ、うがった見方をすればそれらの死を「正当化」している、という点で、イエスの死と殉教者たちとの死とを連続的なものととらえることもできるであろう。

そのような見方、とくに死を「正当化」しうるという点に対して、現代では批判がなされることもある。そこから死の美化、犠牲の美化が生じ、結果弱い立場の人々が犠牲を強いられる構造が生み出された、と考えることができるからである。批判の代表的なものは、「内村鑑三と犠牲」[1]「犠牲の論理とキリスト教への問い」[2] といった一連の文章・講演における高橋哲哉による批判である。

ここで直接高橋に対する反論を展開する意図は、筆者にはない。そもそも高橋氏の批判は弱者が犠牲を強いられることに対する批判なのであって、至極正当なものでもある。よってここでは、この批判に対して問題の整理を少ししておきたい。高橋氏は、イエスが十字架上で死んだことにより人間の贖罪が成し遂げられた、という教理自体についても批判的である。しかし、事実として「開祖」イエスの刑死があったことは否定することはできない。また、イエスの十字架上の死には贖罪という意味付けがなされており、人間の罪ということがキリスト教、とりわけプロテスタント・キリスト教においては重大な問題と考えられているため、他の犠牲死の正当化に用いることができるという問題点があるとしても、罪のゆるしの根拠となる教理を手放すことはできないであろう。

また、イエスの十字架上の死が罪の贖いであるという教えと、その教えを用いてその後の他の人間の死を犠牲死として正当化すること、あるいはさらに正当化できることにより死なざるをえないような方向へと人間を向かわせることとは、別問題であるだろう。キリスト教

---

[1] 高橋哲哉「内村鑑三と犠牲」今井館教友会編『神こそわれらの砦　内村鑑三生誕150周年記念』（教文館、2012）

[2] 高橋「犠牲の論理とキリスト教への問い」『神学研究』63号（関西学院大学神学研究会、2016）

について説明し、宣教するものは、この教理が危険な使われ方をされかねないものであることを意識しておかねばならないということではないだろうか。プロテスタント・キリスト教の立場で考えると、罪の贖いのわざは十字架上のイエスの死で完成しているのである。個々の信仰者の死をそれに並ぶものと考えようとすることは、ルターにより否定された行為義認に繋がることであるとも考えられる。高橋により批判されている内村鑑三の「非戦主義者の戦死」[3]に関しても、内村鑑三の著作の全体的なメッセージを考えるとき、その中心がイエスにならって死ぬことではなく、イエスに従って生きることであることは明らかなのである。内村は時代状況のなかで、宗教者として、愛する人の死を受けとめねばならない人々のために戦死を正当化しているようにも見える文章を記した、ということではないだろうか。

話題を本パネルに戻すとして、本パネルにより改めて気づかされたことは、個々の殉教には一般化などすることができない個別性があること、そしてキリスト教会が、それらをつねに画一的な美しい物語に押し込めようとしてきていたわけではないこと、である。一方で、それらの多様な殉教者たちが、カトリック教会によって「福者」、「聖人」へと認定されていく過程には、様々なレベルでの政治的な意図がある、ということでもある。４万人のキリシタンが殉教した、あるいは188人の殉教者が列福された、というとき、個別の殉教者の姿、物語は見えにくくなってしまう。その際に、見失ってはならないことは、殉教が、信仰生活の結果であるということである。

どのように死んだか、が語られる際には、どのような信仰をもつどのような人間が、どのように生きていたか、ということもまた語られている。中世ヨーロッパに成立し、キリシタン時代の日本でも読まれていた聖人伝・殉教者伝においても、生前の殉教者たちがたとえば学問において、社会的実践において優れた人々であったこと、あるいは隣人愛にあふれた人々であったこと、等々が強調されているのである。

一方で近現代の日本に視点をうつしたときに浮かび上がってくるのが、プロテスタント・キリスト教とその宣教において、殉教がいかなる意味をもつのか、という問題である。

原則として、プロテスタント・キリスト教には、殉教という考え方はない。プロテスタント・キリスト教において、人間の行為に救済につながる意味を見出すことはないのである。それが命を捨てることであっても、である。

日本にプロテスタント・キリスト教が伝えられたのは、長きにわたる江戸時代の禁教期を経た後のことである。カトリックに限らない、キリスト教全体に対する誤解や偏見のもとで、宣教活動をせねばならなかった。少しでも社会に受けいれられやすい存在であることを目指したため、反社会的、セクト的・カルト的な宗教であると見られることを避けようとする傾向が、初期の日本プロテスタント・キリスト教にはある。

---

[3] 内村鑑三「非戦主義者の戦死」『内村鑑三全集１２』（岩波書店、1981）

社会に容認される宗教となるため、日本のプロテスタント・キリスト教会は、国家、国策に親和的であろうとする方向性を選択した。指導者たちには、文化的、倫理的な、よき市民であることを目指そうとする面があった。抑圧・迫害されない宗教である道を模索したのである。そのこと自体が間違っているとはいえないであろう。

その結果、日本のキリスト教会は大勢で戦争に協力することになった。戦争は国家がすることである。国策に従おうとするのであれば、それに反対することは困難である。結果、戦前・戦中期、国家から迫害をうけ「殉教」ともよび得る死に方をする人々を出したのが、主流プロテスタント教派からセクト的と見なされるような教派であったことは、大変考えさせられる事実である。

（いわの・ゆうすけ　関西学院大学神学部教授）